



NEWSLETTER Afrasia

第7号
2009年1月

発行：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター

<http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>

アフラシア ニュースレター



第4回アフラシア国際シンポジウム開催

去る2008年11月15日(土)～16日(日)、龍谷大学大宮学舎清和館において、第4回アフラシア国際シンポジウム“The Question of Poverty and Development in Conflict and Conflict Resolution (貧困と開発の地平から—紛争と紛争解決を問う—)”が開催された。国内から9人、国外から8人の発表者を迎え、それも東南アジア、南アジア、アフリカにおいて研究ないし実践活動に従事している人々を迎えてのシンポジウムだった。プログラムは、2つの基調講演に続いて、Poverty and Dynamics of Conflict Management (貧困と紛争管理の動態) と Rural Community as an Arena of Development and Conflict (開発と紛争の舞台としての地域コミュニティ) という2つのパネル、さらには総括パネル、総合討論から構成され、2日間に亘って延べ100人の出席を得て、会場では活発な議論が展開された。



(シンポ主催責任者 加藤 剛)

プログラム

■ 第1日目 11月15日 (土)

- 09:00 受付
- 09:30-09:35 開会のあいさつ
ボーリングゲント (アフラシア平和開発研究センター長)
- 09:35-09:45 プログラム責任者あいさつ
加藤 剛 (龍谷大学)
- 09:45-10:45 基調講演
司会 中村 尚司 (龍谷大学)
- 09:45-10:15 ビーター リトル (エモリー大学)
“Understanding Poverty in Risky Environments: The Case of Pastoralism in Eastern Africa”
- 10:15-10:45 阿部 健一 (総合地球環境学研究所)
“Beyond the ‘Green Revolutions’: Exploring the Links between Food and Security”
- 10:45-11:00 休憩

パネル I : Poverty and Dynamics of Conflict Management

- 11:00-12:50 セッション I
Local Knowledge of Sustenance and Challenges of Development
司会 青木 恵理子 (龍谷大学)
- 11:00-11:25 加納 啓良 (東京大学)
“‘Agricultural Involvement’ and ‘Deagrarianization’ in Rural Southeast Asia: A View from Case Study in Indonesia”
- 11:25-11:50 ギョツ ホッペ (コンスタンズ大学)
“Appropriating ‘Science’ and ‘Relatedness’: Environmental Conflict and Environmental Knowledge in the Fishery of Kerala (South India)”
- 11:50-12:15 佐川 徹 (京都大学)
“Dynamics of Enmity and Amity and Its Future Prospect among Pastoral Peoples of East Africa”
- 12:15-12:50 質疑応答
- 12:50-14:20 昼食
- 14:20-16:10 セッション II
Situating Poverty in Conflict Resolution and Peace-Building
司会 落合 雄彦 (龍谷大学)
- 14:20-14:45 シャムスル A. B. (マレーシア国立大学)
“Affirmative Action Policy and Poverty Eradication in Malaysia: A Comment on the Impact of the New Economic Policy (NEP)”
- 14:45-15:10 藤倉 達郎 (京都大学)
“Expanding Activities against Deprivation under Civil War Condition: The Case of Bonded-laborers’ Freedom Movement in Nepal”
- 15:10-15:35 川端 正久 (龍谷大学)
“An Agenda for Recovery from Poverty and Conflict in Africa”
- 15:35-16:10 質疑応答
- 16:10-16:30 休憩

パネル II : Rural Community as an Arena of Development and Conflict

- 16:30-18:20 セッション III
Community vs. State: Who Controls Local Resources and for What?
司会 マリア レイナルース カルロス (龍谷大学)
- 16:30-16:55 島上 宗子 (京都大学)
“Reclaiming the Customary Rights to Forest: Forestry Policy and Masyarakat Adat in Post Suharto’s Indonesia”
- 16:55-17:20 鈴木 伸二 (龍谷大学)
“Dilemma of Local Commons Considered from the Viewpoint of Asymmetric Information: A Case Study in Vietnam”
- 17:20-17:45 マーク ベーカー (フンボルト州立大学)
“Conflict or Collaboration? Understanding State-Community Relationships in Community-based Resource Management: Lessons from Local Irrigation and Forest Management in the Western Himalaya”
- 17:45-18:20 質疑応答
- 18:30-20:30 レセプション

■ 第2日目 11月16日 (日)

- 09:30 受付
- 10:00-11:50 セッション IV
Development Agenda and Indigenous People at the Margins
司会 北原 淳 (龍谷大学)
- 10:00-10:25 コリン ニコラス (オラン・アスリ センター)
“Developing the Margins and Marginalizing the Orang Asli”
- 10:25-10:50 ベンクト カールソン (ウブサラ大学)
“Nuclear Lives: Uranium Mining, Development and Indigenous Peoples in India”
- 10:50-11:15 市川 光雄 (京都大学)
“Forests and Indigenous People in Post-Conflict Democratic Republic of Congo”
- 11:15-11:50 質疑応答
- 11:50-13:20 昼食
- 13:20-15:10 総括パネル
Reflections on Poverty, Development and Conflict: Why Should We Care about Other People’s Development and in What Way?
司会 長崎 暢子 (龍谷大学)
- 13:20-13:45 絵所 秀紀 (法政大学)
“Development Aid and Fellow-Feeling”
- 13:45-14:10 バンドゥランガ ヘグデ (アッピコ・チブコー運動)
“Caring for Others to Heal Ourselves”
- 14:10-14:35 ベネディクト アンダーソン (コーネル大学)
“Poverty and Development in National and Global Perspectives”
- 14:35-15:10 質疑 応答
- 15:10-15:30 休憩
- 15:30-17:00 総合討論
司会 杉原 薫 (京都大学)

◆基調講演

危険な環境下での貧困を理解するために（リトル氏） 「緑の革命」を超えて一食糧と安全保障を考える（阿部氏）



▲リトル氏

スーダンやソマリアなどの東アフリカ地域は、援助提供国側で一般的な「牧畜主義 (pastoralism)」という言説を通じて、貧困・低開発・紛争といった負のイメージで語られることが多い。例えば、「牧畜主義者は、貧困を生むだけでなく、環境を破壊する」とのイメージである。リトル氏 (エモリー大学) は、東アフリカの牧畜民を事例として、資産形成や蓄積が容易でないことによる牧畜社会の構造的な「長期的貧困」と、旱魃や武力紛争等で生じる「短期的貧困」とを区別し、後者から前者への移行過程を考察した。また、「牧畜主義者における貧困」と「牧畜地域における貧困」とに分類した上で、両者において貧困への対応は異なることなど、一般的な「貧困」をめぐる概念では説明できない事象を指摘した。

続いて、阿部氏 (総合地球環境学研究所) は、3つの「緑の革命 (Green Revolutions)」を分析用語として、食糧と安全保障の

関係を検討した。第一次「緑の革命」(1950～1980年代)は、国家を対象とし、高収量品種等で穀物生産高を向上させたが国内的には貧富の差を増大させることになった。バイオテクノロジーによる第二次「緑の革命」(1995年～)は、世界に食糧を供給することを目的としているものの、世界人口の三分の一

が飢餓などで苦しんでいる状況にある。そして、第三次「緑の革命」(2007年～)は、バイオ燃料を通じてのものであるが、逆説的に飢饉や紛争を引き起こしている。これら3つの「緑の革命」から、真の「食糧安全保障」とは、食糧の増産 (=「緑の革命」)ではなく、食糧生産の「質」と「種類」の問題であり、格差の拡大した都市と農村をつなぐこと (=「緑の進化 (Green Evolution)」)である、と阿部氏は主張した。



▲阿部氏

(PD 佐藤史郎)

◆セッション I

ローカルな生存維持の知識・文化と押し寄せる開発の波



▲加納氏



▲ホッペ氏

加納氏 (東京大学) は、C. ギアツの「農業のインボリューション」テーゼ (内インドネシアの水田稲作システムは労働集約化によって人口増加を吸収し続ける) の妥当性について批判的な検討を行なった。加納氏は特に 80 年代以降の非農業化と都市化によってギアツの概念では説明のつかない大きな社会変化が起こってきたと論じた。討論では、非農業化の進展とローカルな知識・文化との関連性や、相互扶助の文化の役割などが議論された。

ホッペ氏 (コンスタンス大学) の報告は、南インドの漁民運動における活動家と地元漁民の

主張のズレを明らかにするものだった。活動家たちはトロール漁反対・地元漁民保護のために、科学的知識と同時に、地元漁民のみが「海の子」だというイメージをも効果的に用いてトロール漁関係者を排除してきた。しかし漁民の「母なる海」イメージは排除ではなく繋がり論理であり、また実際、漁民たちはトロール船の存在をうまく利用して漁を行なってきたのである。討論ではさらに、漁民たちが近代科学・技術を駆使している例が紹介された。

佐川氏 (京都大学) の報告は、東アフリカの牧畜民社会において繰り返されてきた集団間の競争と平和が、いずれも越境的な絆によってもたらされるという独特のプロセスを解明するものだった。佐川氏はそのうえで特に、平和構築のための介入にはローカルなポテンシャルを生かすための努力が不可欠であることを強調した。討論では、平和交渉における女性の役割などが議論された。



▲佐川氏

(RA 石坂晋哉)

◆セッションII

紛争解決、平和構築における貧困の位置づけ



▲シャムスル氏

セッションIIでは、東南・南アジア、アフリカの紛争とそこに顕在する貧困に注目し、貧困克服と開発を巡る議論を進展させ、利害対立の解決、平和構築について検討した。シャムスル氏（マレーシア国立大学）は、「貧困」の概念整理とその構造的理解から貧困削減のアプローチを

分析し、マレーシアの五カ年計画、新経済政策の事例より、人間の安全保障、世銀 PRSP (Poverty

Reduction Strategy Papers) の貧困削減のアプローチを評価した。後発地にみられる従来の貧困概念に加え、グローバル化と消費社会に潜む「見えない貧困」の増加という貧困の二分構造を示した。

藤倉氏（京都大学）は、1996年から2006年のネパールのカマイヤ（タルー族の土地なし農業労働者）運動を中心に、貧困層であるカマイヤの土地所有や債務帳消しを巡る問題に着目した。報告では、政府、NGO、コミュニスト、タルー族といった様々なアクターによって、カマイヤ運動の目的が再定義され、運動が深化される一方、支援され

る外部組織によってカマイヤが分化するという矛盾が示された。

川端氏（龍谷大学）は、アフリカにおける貧困削減の取り組みについて、アフリカ諸国の包括的開発計画である NEPAD (New Partnership for Africa's Development)、IMF 構造調整プログラム、国連のミレニアム開発目標、世銀 PRSP 等を検証し、貧困と開発のアジェンダを問い直した。また、紛争解決の観点から、貧困と紛争の相互の因果関係を注目し、欠乏、恐怖からの脅威を改善する人間の安全保障の理念を通し、貧困者に直接サービスを供給する貧困削減こそが、アフリカ諸国の優先課題であると指摘した。(RA 山川貴美代)



藤倉氏▲



川端氏▲

◆セッションIII

コミュニティ vs. 国家—誰が何のためにローカルな資源を管理するのか



▲島上氏



▲鈴木氏

セッションIIIでは、コミュニティによるローカルな資源の管理をめぐって、コミュニティと国家の役割の可能性と、両者の関係性について議論した。島上氏（京都大学）は、インドネシアのマサラカット・アダット（慣習共同体）運動を事例に、ローカル・レベルから森林に対する慣習的権利を主張するプロセスを明らかにした。それは慣習的な森林利用のルール、制度、儀礼等をダイナミックに再構築する過程であり、コミュニティの対外的地位や自己管理能力を高めるための手段であった。

鈴木氏（龍谷大学）は、深刻な資源劣化は開拓地区におい

て生じていると指摘した。ベトナムのある開拓地区では、政治的エリートによる情報の独占により、湿地帯がエビ養殖池として占有され資源劣化を招いた。このことから、情報の非対称性を是正する資源管理モデルの必要性を主張した。

ベーカー氏（フンボルト州立大学）は、国家とコミュニティとの関係が「対立か協調か」という二項図式には収まらないことを指摘した。インド西ヒマラヤにおいて、コミュニティによる灌漑と森林管理を比較し、国家とコミュニティとの協調関係が成立するのは、国家の関心が経済的利益に無いつきや、コミュニティが政治的に動員されるときなど、特定の条件下であることを明らかにした。討論では、ローカル・エリートの役割をめぐり議論が展開され、エリート層主導の資源管理には、階級やジェンダーなどコミュニティ内の不平等を固定化する側面があることが指摘された。



ベーカー氏▲

(RA 松井智子)

◆セッションIV

開発アジェンダと周縁の少数民族



▲ニコラス氏



▲カールソン氏

セッションIVでは、国家や市場主導の開発とそれに対する少数民族の対応について報告が行われた。ニコラス氏（オラン・アスリ センター）は、マレーシア中央政府が森に暮らすオラン・アスリの貧困を是正するために行った開発事業が、かえってかれらの生活を窮乏化させたという矛盾について報告した。またそれに加担したのが知識人や学者、開発エージェントであった。ニコラス氏は、土地に根付いたオラン・アスリの生き方やその土地に対する主権と自治に配慮した解決方法を模索すべきだと述べた。

カールソン氏（ウブサラ大学）は、インド北東部においてウラン採掘事業を推進する中央政府

および採掘業者と地域住民との間の確執をとりあげた。特にこの地域の多数派である少数民族にとって、採掘事業が生活レベルを大きく向上させることが期待される一方、健康被害や、外部者の流入によって自分たちの意思決定ができなくなることを危惧し、採掘事業の是非が地域住民のジレンマを引き起こしていることを指摘した。

市川氏（京都大学）は、コンゴ民主共和国における内戦後の森林開発計画とそれがもたらす問題、及びそれに対する狩猟採集民ピグミーの運動に焦点をあてた。近年、外国資本の伐採会社による大規模な伐採が始まり、政府は持続的伐採のための森林制度改革を行おうとしたが、これは狩猟採集民の森林とその資源に対する権利を等閑視したものだ。これに対して、ピグミーは国際NGOの支援を受けつつ、共通のアイデンティティづくりや、森に対する慣習的な権利を主張する運動を始めた。このような運動が成功するか否かは国際的な支援と当該国政府の理解次第であると市川氏は論じた。



市川氏▲

（RA 渡邊暁子）

◆総括パネル

貧困、開発、紛争について考える

—なぜ他の人々の開発に関心をもつべきなのか、それもどのような形で？



▲絵所氏



▲ヘグデ氏

総括パネルでは、研究者およびNGO/NPOの活動者の三名から報告があった。まず、開発援助における「同胞感情」(fellow-feeling)の重要性について、絵所氏（法政大学）から報告された。報告では開発援助の歴史の変遷を概観した後、同胞感情に基づいた援助を達成するためには、小グループによる日々のフォローが必要であること、また市場を利用したビジネス機会の重要性が説かれた。

次に、ヘグデ氏（アッピコ・チプコー運動）が、NGO活動家の視点から報告した。アッピコ・チプコーとは、インドにおいて人間が樹木を文字通り擁護することによって森林伐採者の手から保護しようとする運動である。報告では今までの資本主義経済開発モデルの結果として、現代の不平等や天然資源の枯渇問題が引き起こされ、少数民族および貧困者が周縁化されてきた

現実が示された。「他人を思いやる自分が自分たちも思いやる」ことに繋がると認識することが重要であり、非暴力主義に基づいて多様性を理解し・受け入れることが、貧困や自然破壊をめぐる紛争解決に繋がることが強調された。

最後に、アンダーソン氏（コーネル大学名誉教授）から「貧困」の定義や概念について、ローマ古典古代から現代にいたるまでの歴史通観的な紹介があった。それは、キリスト教の誕生から啓蒙主義前までの考え方、フランス革命に代表される貧困観、マルサス、ブルードン、マルクスなどの思想、帝国主義・植民地主義時代の状況、第2次世界大戦後のオスカー・ルイスの「貧困の文化」、開発援助、社会主義国家の実験、最近のネオリベリズムの市場主義などへの言及を含むものだった。世界的な規模で人為的な環境破壊が進行しつつあり、ほとんどの国が金融危機に直面している現在、顕著なのは左翼系組織と政党がどこでも無力なことであり、他方でどこの国においても環境破壊と経済危機は貧困層を直撃するだろうことを指摘した。あたかもマルサスの予言が形を変えて現在に蘇ったかのようである。はたしてこの状況は、「富者の文化」を前提とするとき、暴力や革命なしに打開可能なのだろうかとの問題提起がなされた。



アンダーソン氏▲

（PD アイスン ウヤル）

総合討論

総合討論に先立ち、司会者の杉原氏によってシンポジウムにおける17の発表についての簡潔なまとめと、同氏がリーダーを務める京都大学のG-COEプロジェクトの紹介があった。討論では、私有財産、先住民、資源などをめぐって議論が白熱した。2日間の議論



▲総合討論

を通じて明確となったのは、なにを貧困と考えるかは、当該社会の生活様式が遊牧・農業・産業などのどれに依拠するかに大きく関係すること、にもかかわらず

ず現代では貧困とそれを軽減するための開発の理解が、援助提供国である産業化した国々の規準によって一義的になされていること、それがしばしば紛争の原因になっていること、地球資源のキャパシティは無制限な経済発展を維持できない、したがって経済発展の偏重は将来的には資源獲得をめぐる地球規模の紛争をもたらすだろう、などであった。紛争解決のための前提のひとつは、貧困（ないし豊かさ）と開発のあり方についての多様性を認めることだが、これはネオリベラリズム的な市場原理と相容れるのか、あるいは暴力や革命を伴わない平和的な手段で実現できるのか、これも円卓討論で触れられた重要トピックのひとつであった。

(シンポ主催責任者 加藤 剛)

シンポジウムの集合写真&エクスカージョン団体写真



▲集合写真（清和館3階、11月16日）



▲エクスカージョン団体写真、エクスカージョンは西本願寺で行いました（飛雲閣、11月17日）

特別講演：「大国中国」と新日中関係



▲毛利氏

2008年6月21日、深草学舎3号館にて、特別講演「『大国中国』と新日中関係」を開催した。

講演者の毛利和子氏（早稲田大学政治経済学術院教授）は、日中関係を「戦略的友好期」、「安定期」、「構造変動期」、「脱72年体制期」という4つの段階に区分した。そのうえで、これまでの35年間の日中関係は、ルールや制度といった「条理」ではなく、感情やリーダーの人格等の「情理」で動いてきたため、大変脆い関係にあると指摘した。したがって、この脆さをどう変えていこうか、今後の日中関係における課題となる。

また、毛利氏は、日中間における 이슈が「価値」、「パワー」、「利益」の3層構造となっていることを指摘した。それゆえ、新しい日中関係を築き上げていくためには、著書『日中関係一戦後から新時代へ』（岩波新書、2006）の中でも提言されているように、イシュー別チャンネルの設置等、6つの具体的な措置をとることが求められていると主張した。

コメンテーターの濱下武志氏（本センター第3班班長、本学国際化学部教授）は、対日認識を主導している中国の中間層とはどのような人たちのか等の質問を行い、議論を大いに盛り上げた。

(PD 佐藤史郎)

研究会リスト (敬称略)

■ 2008年5月31日 / 第2班 SGSD 研究会

澤野久美, 市田知子 "Development from Home Life Improvement Group to Rural Women's Entrepreneur"

■ 2008年6月5日 / 第3班研究会

"Japanese Educational Policy in the 21st Century: Where Have We Come from and Where Are We Headed?"
William Bradley, "Globalization as Standardization: Insulating a Core of Identity"
David Blake Willis, "A Nation at Risk, A Nation in Need of Dialogue: Citizenship, Denizenship, and Beyond in Japanese Education"
Julian Chapple, "Multiculturalism vs. Nationalism: Accommodating Diversity into Japan's Education System"
Jeremy Rappleye, "The Decline of the Technocrats in Japanese Educational Policy? Exploring the Loss of Ministry Autonomy and its Implications for Recent Policy Trends"
Robert Aspinall, "The New 'Three Rs' of Education in Japan: Risk, Responsibility and Rights"

■ 2008年6月7日 / 第4班研究会

増田和也 「インドネシアの森林地帯における土地紛争とアダットの再編成」

■ 2008年6月21日 / 特別講演

毛利和子 「『大国中国』と新日中関係」

■ 2008年6月29日国際セミナー

"The Impact of Globalizing Economy on Local Resources Management and Community Development for Conflict Resolution"
Raymond Jussaume, Louise Fortmann, 北原淳, 斎藤千宏, 青柳みどり, 田中敬子, 黒崎卓, 中村尚司, 河村能夫.

■ 2008年7月4日 / 第1班研究会

戸塚悦朗 「国連人権機構改革がアジア地域紛争解決に及ぼす影響に関する研究—軍性奴隷問題を焦点に」

■ 2008年7月12日 / 第2班研究会

中村尚司 「環境問題とCO2排出権取引市場—金融のグローバリゼーションをめぐって」

■ 2008年7月16日 / 第2班研究会

田中敬子 「フードアクセス・アセスメント—ケンタッキー州レキシントン市でのケーススタディから学ぶ」

■ 2008年7月19日 / 第4班研究会

李復屏 「中国の貧困削減政策と貧困構造—問題の整理と今後の展開にむけて」
北原淳 「近代タイにおける森林政策—チーク林を中心に」

■ 2008年9月19日 / 第1班研究会

山川貴美代 「ネーション形成における紛争—シンガポールにおける多元主義の成立」
石坂晋哉 「ガンディー主義における『民衆への奉仕』」
佐藤史郎 「E・H・カーの残像—英国学派における3つのイメージ像」

■ 2008年10月4日 / 第4班研究会

望月克哉 「ナイジェリア石油産出地域における紛争とその背景—『リソース』をめぐる地域住民の権利要求と反目・対立」
澤良世 「社会再統合と和解に果たす市民の役割—シエラレオネの事例から」

■ 2008年10月10日 / 第3班研究会

マリア レイナルス カルロス 「老人介護施設における外国人介護労働者の受け入れ制度・政策—シンガポールと日本のケース」
佐藤千鶴子 「送り出し国から見た看護師の国際移動—フィリピンと南アフリカのケース」

■ 2008年11月15—16日 / 国際シンポジウム

「貧困と開発の地平から—紛争と紛争解決を問う」
ポーリン ケント, 加藤剛, 中村尚司, Peter Little, 阿部健一, 青木恵理子, 加納啓良, Götz Hoeppe, 佐川徹, 落合雄彦, Shamsul A.B., 藤倉達郎, 川端正久, マリア レイナルス カルロス, 島上宗子, 鈴木伸二, Mark Baker, 北原淳, Colin Nicholas, Bengt Karlsson, 市川光雄, 長崎暢子, 絵所秀紀, Pandurang Hegde, Benedict Anderson, 杉原薫

■ 2008年11月21日 / 第1班研究会

本條晴一郎 「非暴力と対話の実践」
権五定 「韓国の軍事政権下(1960-1980)におけるナショナリズム教育とその後の変化」

■ 2008年12月6日 / 第3班関連国際学術シンポジウム

「よみがえるルース・ベネディクト—紛争解決・文化・日中関係」
ポーリン ケント, 土屋礼子, 福井七子, 胡備, 郭連友, 濱下武志

■ 2008年12月11日 / 第1班関連国際シンポジウム

「東アジアにおける近現代史教育—学校教育は和平構築に貢献してきたか」
ポーリン ケント, 権五定, 朴用助, 権五鉉, 趙恩敬, 森田裕子, 富岡智史, リ・ラン, 朴南洙, 長崎暢子, 嵩満也

刊行物

《Afrasia Working Paper Series》

- No.35 Anan Ganjanapan, *Multiplicity of Community Forestry as Knowledge Space in the Northern Thai Highlands*
No.36 Shinji Suzuki, *The Increasing Enclosure of Mangrove Wetlands: Towards Resource Management in Development Frontiers*
No.37 Akiko Watanabe, *Migration and Mosques: The Evolution and Transformation of Muslim Communities in Manila, the Philippines*

《研究シリーズ / Research Series》

- No.3 シンポジウム報告書 ウィリアム・ブラドリー、濱下武志、内田晴子、松井智子、佐藤史郎編 「日本人論への問い (2006年10月6日)」
No.4 シンポジウム報告書 マリア・レイナルス・D・カルロス、中井久子、後藤由美子、内田晴子、松井智子編 「フィリピン人介護士受け入れ戦略—アメリカ・シンガポールからの教訓—さあ、日本はどうする? (2007年7月14日)」
No.5 *Is There A Japanese IR? Seeking an Academic Bridge through Japan's History of International Relations*, Kosuke Shimizu, Josuke Ikeda, Tomoya Kamino and Shiro Sato (eds.).

その他の刊行物については本センターのウェブサイトをご覧ください。 <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>

文科省より「A・A」の中間評価



2007年度に3年目を迎えた本センターの活動について、文部科学省より中間評価の通知があり、「A・A」の評価(平成19年度実施分)を得ました。

総合所見では、「プロジェクト全体の枠組みは明確であり、シンポジウム、研究会などが計画的に行われていること、そして若手研究者育成の面で成果に繋がっていることは評価できる」等の評価を得ました。

お知らせ

朝日・大学パートナーズシンポジウム

日時: 2009年6月20日(土) 午後1時30分~午後5時
参加申込み等シンポジウムの詳細については後日、朝日新聞と龍谷大学ホームページを通じてお知らせ致します。
(関連記事 <http://www.asahi.com/shimbun/sympo/release/090122.html>)

朝日新聞大阪本社と大学が共催する「朝日・大学パートナーズシンポジウム(APS)」の2009年度上半期公募枠パートナー大学として、龍谷大学アフラシア平和開発研究センターが採択されました。今回採択されたシンポジウムは「Who cares?」(誰が私たちの面倒をみるの?)で、本研究センターの研究テーマである紛争と解決の視点から、国際化が進む日本の高齢者介護を取り巻く諸問題(目に見えない紛争)と今後の可能性について取り上げます。基調講演として、『おひとりさまの老後』の著者である上野千鶴子氏(東京大学大学院人文社会系研究科教授)をお招きし、「今後の日本の介護と方向性と展望について」(仮題)お話しいただく予定です。

アフラシア ニュースレター 第7号 2009年1月

発行/龍谷大学アフラシア平和開発研究センター

〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5 TEL/FAX 077-544-7173 <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>

編集/加藤剛、佐藤史郎、アイスン ウヤル

印刷/株式会社 田中プリント